

# 十段物語



## 第5回

一押し二引き三かわせ、技は力の

花とこそ知れ 飯塚 国三郎

本橋 端奈子

立身出世を志し上京



飯塚国三郎十段

飯塚国三郎くにしきぶろうは明治8（1875）年2月13日、栃木県都賀郡幡張村に次男として生まれた。朝に生まれたので、飯塚の父は朝太郎と名付けようか迷ったが、結局籤を引いて「国三郎」にしたという。実家は代々庄屋をしている大きな農家で、飯塚は草刈りや薪取りなどを進んで手伝い、そのことが幼い身体を自然と鍛え上げることに繋がった。また、通っていた藤岡高等小学校まで約6キロの道のりを毎日歩き通すほど、足腰

が丈夫なことが取り得でもあったようである。

明治初期に生まれた少年であれば必ず抱くであろう「名を成したい」という想いを、飯塚も持っていたのである。明治21（1888）年13歳で高等小学校を卒業後、立身出世を志して栃木の実家を飛び出し、一人で東京へ上り翌年慶應義塾へ入塾、三田にあった童子寮に入った。この慶應義塾で、飯塚は生涯を費やす柔道と出会うことになる。慶應ではこの頃、小南英策二段ら数名が柔道倶楽部を組織し、塾生らに柔道を教えていた。飯塚は小南らに誘われて、月5銭で稽古をつけてもらうことになる。この柔道倶楽部での週に3回ほどの稽古で、すっかり柔道の面白さに開眼した飯塚は、学校もそこそこに柔道に熱中していくのであった。1年半ほど慶應義塾に通った飯塚ではあったが、自分の道は軍人にこ

そあると思いを新たにし、明治24

(1891)年16歳の時、海軍兵学校への登竜門として、麹町区に創立された海軍予備校<sup>7</sup>に入学を果した。

ここでは奇しくも後の講道館十段である磯貝一と同級となる。しかし海軍予備校に入ったのは良いが、予備校には柔道倶楽部のような組織は当然ながら無く、飯塚は慶應で覚えた柔道の楽しさをどうしても忘れられないでいた。そんなある日、予備校の近所にある平川天満宮の境内で友人とたむろしていると、柔道衣を担いだ男が歩いているのが目に入った。飯塚はふと「あの後をついていったら柔道場があるかも知れない」と思い、男についていくと、果してある柔道場に行き当たったのである。この柔道場こそ、当時麹町区上二番町を本部としていた講道館であった。飯塚はすぐに入門を願い出、晴れて講道館門下の一人となる。明治24年

11月23日のことであった。

### 奮起して柔道修行に励む

飯塚は慶應の柔道倶楽部で心得があったので、少しは講道館の門人も渡り合えるのでは、という気持ちで最初の稽古に臨んだようである。しかし、これは大きな間違いであった。はじめの頃の稽古について、飯塚は以下のように振り返っている。

早速稽古衣を着かえて稽古したところが、東大の西壮太郎という剛の者にぶつかったわけ。この人は背が大きくして大変腰技のうまい人で、私は非常に叩きつけられた。そうして三十分ばかりかじりつくようにしがみついておったんだけれども、どうしても右に左にぶん投げられる。口惜しいが如何とも仕方がなくなって、ほうほうの態で帰ったわけだ。そしてどうかしてこいつを仇討ってやらなけ

りゃいかんというのが、わたしの奮発の最初だね。(また)当時わたしは幼稚な柔道の修行者であったんだけど、山田常次郎<sup>8</sup>なるものと稽古をやった。そうすると他の連中と違って非常に体捌がうまい。投げられてみるとどうすんとかいうように投げられた。さほど身体は大きくないし、無駄な力もいれないが、まあ体落、大外刈というような技で投げられたと記憶しているが、(略)名を聞いてから名札を見ると四段のところにかかっている。成る程技術というものは大したものだと思ったのです。

講道館のいわば本場の柔道に触れて、その技術の高さに驚いた様子が見て取れよう。西に滅茶苦茶に投げつけられ、それに憤慨して仇を取ろうと考えるあたり、直情型の飯塚の性格を良く表していると言えるであろう。

これから飯塚は奮起して、講道館の猛者たちに採まれて修行に励むこととなる。

入門してすぐに恒例の寒稽古が始まり、飯塚は、朝の4時ころから一番槍で講道館に詰め、火の出るような猛稽古を行った。果敢に先輩らに稽古を挑むが、身体が小さいこともあり、少し力を入れれば足払で投げられ、かがんでしがみついていると腰技で投げられ、とやはり最初はやられっぱなしだったという。だが、このひと冬の猛稽古でだいぶ上達し、背負投など得意技も身につけてきて、他流から練習に来る大家を投げ飛ばすまでになっていた。そして、明治26（1893）年秋の紅白試合に飯塚は無段甲組の大将として出場、相手の大将を2度投げて、嘉納師範から直々に初段を許されたのであった。飯塚はこの頃には海軍予備校を卒業し、二松学舎へ入学しているが、

もともと実家を顧みず東京に飛び出してきているので、家からの仕送りも滞りがちでかなりの苦学生であったようである。軍人になるという展望は低い身長のこともあって上手く行かず、次第に実業家を目指すようになっていた。柔道は楽しかったが、しかしこれを仕事にしようとは思いつかなかったという。明治28（1895）年1月、鏡開式において19歳にして二段となるも、将来のことを考えると次第に講道館から遠ざかるようになっていった。

嘉納師範は飯塚の、裏表の無い直情・直行の氣質を好いていたようである。飯塚の足が講道館から遠のき出すと、師範は飯塚を掴まえては「飯塚、この頃は元気かね」と柔らかな面差しで飯塚の頭を撫でた。<sup>10</sup> 飯塚は、この笑顔に魅せられてまた講道館に通い出すということを繰り返していたという。そして明治29（18

講道館創立百二十周年記念

## 術から道へ

ビデオ

明治十五年（一八八二）、嘉納治五郎師範が講道館柔道を創始されてから二十周年を迎える。柔道はオリンピック種目となり、人種、言語、政治、宗教などを超越して一八〇を越す国々に広く普及している。柔道はなぜこのように世界に広まったのだろうか。創立百二十年を機会に日本の文化として世界に誇る柔道がどのような道として生れ、どのように広まってきたのだろうか。嘉納師範の技と心を改めて振り返る。

企画・制作・監修／財団法人 講道館  
制作協力／藝美プランニング

定価 三、六七五円  
送料 実費  
（本体三、五〇〇円）

◎お申込・お問い合わせ先

〒112-0003  
東京都文京区春日1-1-16130

講道館 総務部

TEL 〇三三三八一―七二五五  
FAX 〇三三三八―八13六1四

96)年、師範はとうとう使者を立てて、飯塚に講道館で働かないかと誘いを持ちかけてくれたのである。師範の情に感じ入った飯塚は肚を決め、嘉納塾に寄宿して講道館の仕事を手伝うことになったのであった。

### 嘉納師範からの手紙

明治29年4月5日、飯塚は朋友の永岡秀一<sup>11</sup>とともに三段に列せられ、講道館で指導をするかたわら、高等師範学校の柔道教授をしていた横山作次郎の助手となる。またこの年の夏には、飯塚の提案によって現在にまで続く1カ月の講道館暑中稽古がはじめて執行されている。翌30(1897)年1月の鏡開式における乱取では、講道館きっての大兵、肝付宗次と組むこととなった。肝付は173cm約100kg、飯塚は154cm58kgと、かなりの体格差がありはしたが、飯塚は肝付を背負投や釣込腰で立っている

間も無いほどに投げつけた。<sup>13</sup>この試合を、鏡開式に列席していた鹿児島県高等学校造士館<sup>14</sup>の岩崎行親は感激して見入っていた。飯塚の技のキレ、また小兵が大兵を打ち負かすその気概にすっかり惚れ込んでしまったのである。その場で、造士館の柔道助教授として飯塚を迎えたいと嘉納師範に懇請し、遂に飯塚は鹿児島へ派遣されることになったのであった。

飯塚22歳の初春のことである。造士館では、寮の舎監も兼ねながら生徒らに柔道を教えた。はじめのうちには真面目に真剣に指導をしていた。だが、ある日の晩、就寝時間を過ぎてても外で遊んでいる寮生を4、5人投げ飛ばしたのが大問題となり、カッとなった飯塚は辞表を叩きつけて東京に帰ってきてしまったのである。たった数カ月の鹿児島生活であった。この行動からも、自分が正しいと思えばそれを曲げるのが難しい性

格であろうことが窺えよう。飯塚は東京に戻った方がいいが、嘉納師範に書面で帰京を伝えたのみで、さすがに顔を合わすのはためらったようである。すると、師範から1通の書簡が届いた。

御書面拜見、愈々過日御話の方針に決定被成候由、然る上は特に一の注意いたし度事有之候、

何事を為すにも用意周到なるを要す、他人の意見を聞く機会あらば虚心平氣に之を聞き、冷静に判断せられ候、他人の意見を聞く機会無之時は一挙一動の結果を考え、何事も苟もせぬ様被成度、是、其許に於ては成功に必要な注意かと存候、

右、御答まで 草々不尽

四月十八日 嘉納治五郎

飯塚国三郎殿<sup>15</sup>

飯塚の性格を咎めるでもなく、あくまで優しく成功への要点を説く師範

に、飯塚への愛情が垣間見える。飯塚はこの書簡に滲み出る師範の情に深く感激し、これを表装して座右の銘として生涯大切にしたのであった。師範は飯塚を見限ることは無く、飯塚を重用する様子に変わりはありません。

そしてその後すぐ、師範の勧めもあって仙台の第二高等学校<sup>16</sup>で1年間柔道教授を受け持つこととなる。この間、ちょうど第一高等学校<sup>17</sup>で柔道教授をしていたのが友人の永岡秀一だったこともあり、一高対二高の対抗柔道試合が行われた。この試合は後の高専柔道大会に続く学校対抗試合の嚆矢となった。

## 国士として

飯塚は身長こそ154cmと小柄であったが、全身が鋼鉄のバネのごとく鍛え上げられており、並外れた怪力の持ち主であった。その怪力から繰り

出される技は凄まじく、左大外刈は「うまく崩したならば浅く、低く、かかとの近くを敏速に刈る」という、誰も敵わないほどの天下一品の技であったという。<sup>19</sup> その鍛え上げた体については、師範との間に以下のような逸話がある。嘉納師範が長野県の野尻湖畔に土地を買い、飯塚と磯貝一を連れてその土地を見に行った際のことである。

野尻湖に行って（嘉納）先生の買った場所を見たが、景色はいいし、実に涼しいところだ。そして先生は、飯塚お前にも二、三百坪くれるからして別荘つくれと云われたが、別荘つくるのはいいとしても、こっちは往き帰りの旅費だってありはしないんだから、あまりありがたくもない（笑声）。（略）先生はなかなかの足自慢だった。前にも先生は自分の持山である長範山に、永岡なんぞを連れていったん

だけれど、永岡は足が弱いものだからひどい目にあったと云う話を聞いていた。嘉納先生は足では講道館の者には誰にも負けないと云っておられたが、僕は元来足が強い。野尻湖から田口温泉まであすこは二里か三里あると思うが、その田口まで歩くのに、磯貝はぼとんぼとんと歩き、嘉納先生は先頭にたって歩いてゆく。それから僕はその後について初めは調子合わせていったんだけれども、先生がえらい自慢をやるもんだからヨシというわけで負けん気で歩くと先生も負けではない。それで磯貝はおっぼり出して、先生と二人、とうとう田口まで競争してしまった。その時先生はまめをつくってしまった。（略）そしてそれをつぶしちゃっていたものだから大変だった。<sup>21</sup>

この時の嘉納師範のまめは本当に大事であったようで、その後師範が足



に包帯を巻いている写真が現存している。師範と飯塚どちらも負けず嫌いの性質で、飯塚のそういった部分が嘉納師範に愛着を持たれる所以であるかも知れない。

明治32（1899）年1月の鏡開式において四段に昇段した飯塚は、福岡県に転じ、県立中学修猷館や師範学校で柔道を教授しながら九州各地でも柔道普及に務めることとなる。そして地方にいなながらも2年後の明治34（1901）年には五段へと昇段を果すのであった。巡回指導で長崎県へ赴いた際には、かつて「講道館の西郷」として名を馳せ、当時は長崎で東洋日の出新聞を発行していた西郷四郎と柔道稽古をしたこともあったという。この時の様子を飯塚は思い出深く述懐している。

私（飯塚）が、「君（西郷）の名はしばしば聞いて居るが、一度も稽古を見たことがない。一つ誰も

いないところでぼくと稽古をして呉れんか」と言うところ「宜しい。おれはもう後備になっているのだけれども、やろう」というので、二人っきりでその道場で稽古をやったが、わたしが感じたのは、実に円転、柔らかくして、投げてみてもまことに綺麗に受身をやる。技を入れてみてもそれに逆らわず技に乗る。兎に角嘉納先生が「腰技をやれば腰技をパッと離れてしまふ、離れるから今度は足を出して払腰で西郷を投げた」とか、いろいろのこの話はもう承っておったんですが（略）体格には優れていないが、本当に稽古をやった、という感じで、如何にも滑らかなんだ。<sup>23</sup>

九州一円で6年ほど柔道普及に励んでいた飯塚であったが、時勢は日露間において風雲急を告げており、飯塚も軍人にこそならなかったが、こ



満州での演武会記念撮影 後列左から3人目が飯塚。柔道衣が無かったため、朝鮮服に日本袴を着用している（明治38年）

の時こそ国士として何をか成さんという気持ち強く持っていたようである。友人の政治運動家内田良平らの懇請を受けて、柔道教授の職を辞し満州に飛んだ。<sup>24</sup> この時の任務は詳らかでは無いが、民間の特務工作員として明治39（1906）年まで日本のため満州・樺太で活動したよう

ある。<sup>25</sup>その活動中、日本・朝鮮・清の武術家が集まり武術大会が開催されたことがあった。試合の前に、柔道がどういふものか見せてくれという要望があり、飯塚は日本軍の中にいた講道館門人を相手に投げ・絞め・関節技と様々な技を披露した。すると、武術家らは柔道というものに恐れをなし、試合を放棄してしまったということである。<sup>26</sup>

### 徹底澄清

明治39年、31歳で樺太から帰国した飯塚は、縁あって慶應義塾の柔道部師範となる。大陸において名を挙げたいという望みも捨てがたかったが、「坊主になった気持ちで」<sup>27</sup>学生らの指導を引き受けたという。以降昭和17（1942）年まで約35年間、飯塚はまさに心血を注いで師範の職を勤め上げたのだった。塾生らも、飯塚に礼を尽すために「飯塚先生後

援会」を立ち上げるなど、誠意をもつて飯塚に応えた。また慶應義塾の他にも、水産講習所や東京農業大学、東京工業大学などの柔道部でも精力的に教化に務めている。

飯塚は明治41（1908）年には六段、大正5（1916）年には七段と、順調に段を重ねて行き、講道館の指南役も任されるまでになる。そして、大正11（1922）年46歳にして八段に昇段すると、私財を投げ打って豊多摩郡渋谷町豊沢の自宅

に至剛館という道場を設立するに至った。設立の趣旨は、飯塚が今までの己の柔道修行を省みて、身体を鍛えることばかりを重視するのではなく精神をも鍛えることも広く伝える必要があると悟ったためである。飯塚は次のように語っている。

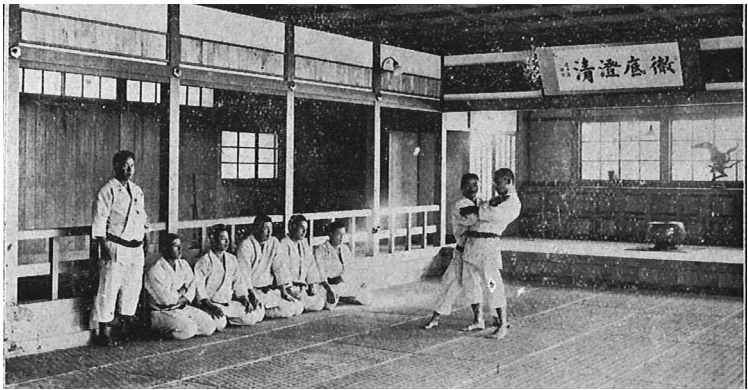
私は総ての熱をここへ注いで、溶鉢炉の如きものかのように念願です。

青少年達を剛柔の熱火に掛け、良

知の流に鍛錬し、純化せしめるところの機関としたいと思います。至大・至誠・至剛の精神を以て訓旨する念願です。これによって身心の健全を期することが出来ると思います。<sup>31</sup>

嘉納師範もその方針に強く同意し、開所式には飯塚の生き方を表すような「徹底澄清」の自筆大書を送っている。<sup>32</sup>そして道場の半分は武道研究所として技の研究を進めるとともに、その根本・基礎である精神の教育に力を注いでいった。飯塚は研究の一環として、柔道のみならず剣道やボクシングの練習を行い、柔道へそれを生かすなどの工夫も行っていった。

昭和12（1937）年12月22日には、三船久蔵らと共に九段位に列せられるも、その翌年に嘉納師範は急逝し、この九段位が最期の置き土産となった。次第に日本は戦争の波に



至剛館で指導する飯塚、奥には嘉納師範の大書「徹底澄清」が掲げられている（大正11年）

飲み込まれていくも、飯塚は己の信念を貫く生き方を変えはしなかった。終戦後、学校柔道は禁止されたが、

柔道をやりたい慶應塾生らを自宅の至剛館に呼び集め、同好会的な形で柔道教育を続けたのであった。

そして、戦後の混乱のまだ残る昭和21（1946）年5月4日、第2代講道館長である南郷次郎は、飯塚に十段位と「多年の御尽力に対する寸志」として公債2000円を贈る。<sup>33</sup>71歳、史上4人目の講道館十段であった。「昇段証書に公債をつけて頂戴したのは僕が初めてじゃなかろうか」と飯塚は笑っていたという。十段に列せられた気負いあまり感じられないあたり、我が道をゆく飯塚らしいといえるであろうか。

昭和23（1948）年になって、ある所から、柔道をプロ化しようという動きが活発になってきた。飯塚はプロ柔道が、戦後の職の無い時代に柔道家たちに生計の道を与えるという目的で興ったことを聞き、それならば、と協力を快諾した。練習場

所として至剛館を提供し、自らは名誉会長となって尽力するも、プロ柔道は数年で立ち消え、飯塚は様々な批判を一身に受ける結果となってしまった。<sup>34</sup>それでも飯塚は俯仰天地に愧じず、その行いの正しさを信じ続けたのであった。飯塚の晩年はこのプロ柔道のこともあり、また気にかけてくれる嘉納師範が既に鬼籍の人であることもあって、講道館からは遠ざかっていったようである。しかし、柔道の根本を学び取り伝えたいという気持ち、また柔道界の将来を案ずる気持ちは誰よりも強いという自負があった。<sup>35</sup>その想いは昭和33（1958）年7月25日、83歳でこの世を去るまで決して変わることはなかった。飯塚のかねてからの遺言により、遺体は柔道衣で覆われ、納棺された。最後に、亡くなる直前に飯塚が語った、柔道の展望を紹介して終わりたい。



一本と云うやつはね、投げた方の人間がちゃんと姿勢が出来てなくてはいけない。敵を投げてもすぐに二の矢がつげる様な形でなくてはいけないんだ。だから股ぐらへもってって足を入れてケンケンをして角力の様に押し出すとか、それからして伸び切ったからして落ちたなんて技術は賛成は出来ない。股ぐらへ足を入れると同時に相手が投げられているというような技が望ましい。(略)とにかく衆知を集めて今の様になって来たのだから、今の柔道を全体に否定しようとは思わない、しかし柔道を現状のままでは後世に残してもらいたくないんだね、今のままでは必ずこれはつまらなくなってくると思う。やっぱり技術はもっともって精密でなければね、それに精神的に見てももっとも高いものにならなくては、柔道やる人が見る

人の恩恵によって生きてゆくということになる。芸人化しちゃうんだな、そんな柔道は盛んにしてみたくないと思う。柔道はもっともって高い、もっともって深いものがあると思うんだ。<sup>36</sup>

\*引用文献は現代漢字・仮名遣いに改めた。  
\*標題は、飯塚が語った柔道観である。

《主要参考文献》

1 「思い出すままに(その一)」 飯塚国三郎(談)『柔道』第27巻第9号(昭和31年9月)

《その他典拠・註》

1 現・栃木県下都賀郡藤岡町。幡張村は、明治22年に他村との合併により三鴨村、昭和30年更に合併により藤岡町となる。

2 「思い出すままに(その二)」 飯塚国三郎(談)『柔道』第27巻10月号(昭和31年) 飯塚には姉がいたため、次男ではあるが3番目の子供という意味を込めて「国三郎」となったという。

3 「子の柔道生活」 飯塚国三郎著 『慶應義塾柔道部史』三田柔友会(昭和8年9月)

4 現・東京都港区三田

5 「一塾生たりし頃」 飯塚国三郎著 『慶應義塾柔道部史』三田柔友会(昭和8年9月)

6 現・東京都千代田区麹町

7 現在の海城中学校・高等学校の前身

8 富田常次郎七段。講道館四天王の一人

9 「回顧七十年」座談会 『柔道』第23巻

第12号(昭和27年12月)

10 「飯塚先生の片影2」 佐藤忠吾著 『柔道新聞』第192号(昭和34年1月10日)

11 後の講道館十段

12 飯塚の談には、「もと寒稽古というものはあったんだが、その頃まで暑中稽古はなかったんだ。それで冬にもやるんだからして夏もやったらどうですかということは何が申し上げた。何しろひまだった。(略)夏も稽古をやって人が大勢来れば面白いだろうと暑中稽古を献策したらそれが採用されたわけだ。その頃僕なんか21、2だから子供みたいなものだが、その意見でもよいとさえ思えばすぐ採用されるんだ。そして先生のことだからその暑中稽古も一度はじめるはずとやり通されるんだ。やはりえらかったと思うね」とある。(「思い出すままに(その一)」 飯塚国三郎(談) 『柔道』第

- 27 卷第9号(昭和31年9月)
- 13 『柔道を創った男たち』飯塚一陽著 文芸春秋 平成2年
- 14 後の第七高等学校校造士館。現在の鹿児島大学の前身の一つ
- 15 「思い出すままに(その一)」飯塚国三郎(談)『柔道』第27巻第9号(昭和31年9月) 明治30年の書簡と推測される
- 16 通称二高。現在の東北大学の前身の一つ
- 17 通称一高。現在の東京大学の前身の一つ
- 18 「柔道百人」工藤雷介著「ゴング」9月号増刊 日本スポーツ出版社(昭和59年9月)
- 19 前掲註9参照。佐村嘉一郎十段の回想
- 20 新潟県妙高高原にある温泉地
- 21 前掲註2参照
- 22 「父飯塚国三郎十段を語る」飯塚一陽著『柔道』第43巻第9号(昭和47年9月)
- 23 前掲註9参照
- 24 前掲註22参照
- 25 実現しなかったが、当初の目的は「ロシア艦が海峡を通過するとき、ダイナマイトを担うて突撃し、これを爆破する」という決死の作戦に参加するためであったようである。(『柔道を創った男たち』飯塚一陽著 文芸春秋 平成2年)
- 26 「十段物語(下)」古河残星著 『柔道』第36巻第5号(昭和40年5月)
- 27 前掲註5参照
- 28 「飯塚先生後援会の由来」吉武吉雄著『慶應義塾柔道部史』三田柔友会(昭和8年9月) この後援会が後の三田柔友会である
- 29 現・東京海洋大学
- 30 現・東京都渋谷区恵比寿
- 31 「町道場めぐり(2)」『柔道』第6巻第2号(昭和10年2月)
- 32 前掲註31参照
- 33 「飯塚先生の片影6」佐藤忠吾著『柔道新聞』第1955号(昭和34年2月20日)
- 34 前掲註13参照
- 35 「至剛館柔道研究所設立」『有効の活動』第8巻第3号(大正11年3月)
- 36 前掲註2参照
- 《写真典拠》
1. 講道館柔道資料館 柔道殿堂展示写真より
  2. 『柔道を創った男たち』飯塚一陽著 文芸春秋発行(平成2年)
  3. 『有効の活動』第8巻 第3号(大正11年3月)

人間の記録

# 嘉納治五郎

私の生涯と柔道

四六版 三二六頁 一八九〇円(送料別)

嘉納治五郎著(著)日本図書センター刊

発行者 高野 義夫

嘉納治五郎の人物・顔見、柔道とは何か、講道館柔道の発展の経緯、嘉納治五郎の偉大な教育家としての抱負とその実力等、嘉納治五郎の研究及び日本の近代化の推移等の研究には見逃せない資料である。



嘉納治五郎

※お申し込み・お問い合わせ先

〒112-0003

東京都文京区春日 2-1-16-130

講道館総務部

電話 〇三-三三-八二-一七二五五